

「副王家の一族」

☆☆☆

2009（平成21）年11月21日鑑賞
テアトル梅田>

監督：ロベルト・ファエンツァ

原作：フェデリコ・デ・ロベルト『副王たち』

コンサルヴォ（ウゼダ公爵家の長男）／アレッシンドロ・プレツィオージ

ジャコモ・ウゼダ公爵（ウゼダ公爵家の当主、コンサルヴォの父親）／ランド・ブツァンカ

テレーザ（コンサルヴォの妹）／クリスティーナ・カボトンディ

ジョヴァンニーノ（コンサルヴォの従兄弟で無二の親友）／ガイド・カプリーノ

ライモンド伯爵（コンサルヴォの叔父、ジャコモの弟）／フランコ・ブランチャローリ

フェルディナンダ（コンサルヴォの大叔母、ジャコモの叔母）／ルチア・ボゼー
ブラスコ師（ジャコモの叔父）／ペップ・クルス

ガスパレ公爵（ジャコモの叔父）／セバスティアーノ・ロ・モナコ

カルメロ（敬虔な修道士、ブラスコ師の異母弟）／ヴィート

ルクレツィア（ジャコモの妹）／ジゼルダ・ヴォロディ

ジュレンテ弁護士（ルクレツィアの夫）／パオロ・カラブレイジ

キアラ（ジャコモの妹）／アンナ・マルチェッロ

2007年・イタリア、スペイン映画・122分

配給／アルシネテラン

<『山猫』と並ぶ大河ドラマから何を学ぶ？>

本作はイタリア統一に揺れた19世紀の時代、ブルボン家の「副王」としてシチリア島に生きる貴族ウゼダ家の当主ジャコモ・ウゼダ公爵（ランド・ブツァンカ）と、その長男コンサルヴォ（アレッシンドロ・プレツィオージ）の人生を描くもの。もちろん主人公はコンサルヴォで、彼の回想として構成される物語は、彼が12歳（1853年）から77歳（1918年）までの大河ドラマだ。そう聞くとすぐに思い出すのが、貴族たちの豪華絢爛たる舞踏会のシーンが印象的だった、アラン・ドロンとクラウディア・カルディナーレが共演した名作『山猫』（63年）。本作の原作となったフェデリコ・デ・ロベルト作の『副王たち』がジュゼッペ・トマーシ・ディ・ランペドゥーサ作の『山猫』に大きな影響を与えたいから、まさに本作はもう1つの『山猫』だ。

歴史に弱い日本人は、フランス・ドイツ・イタリアなどが日本と同じように2000年も続いた国だと思っているかもしれないが、ドイツやイタリアが統一国家となったのは19世紀のこと。ナポレオンによるイタリア遠征や、赤シャツ隊として有名なガリバルディのシチリア上陸とローマへの進撃など、個々の歴史的な事実は知っていても、イタリア統一の歴史を語る日本人は少ないのでは？日本では11月29日からNHK大河スペシャルとして司馬遼太郎の『坂の上の雲』が放映されるから、明治日本の成り立ちはそれで勉強すれば良いが、イタリア統一の歴史を学ぶには本作は絶好。『山猫』と並ぶ大河ドラマから、あなたは何を学ぶ？

<存在感と華のある男優陣に比べ、女優陣は？>

少年時代のコンサルヴォが見る、絶対的権力者である当主ジャコモを中心とするウゼダ家の有り様は、多少ユーモアを含んだ牧歌的なもの。しかし、1860年にガリバルディの赤シャツ隊がシチリアに上陸したことによって、それまで修道院に閉じ込められていたコンサルヴォが従兄弟で親友のジョヴァンニーノ（ガイド・カプリーノ）と共に自由を得た時から俄然様相が変わってくる。もっとも、ウゼダ家の長男として生まれたコンサルヴォにはホントの自由などなく、ここから始まる父親ジャコモとコンサルヴォとの確執が物語の軸となっていく。その父子の確執と対立は、ジャコモが死亡するまで続くからすごい。

ウゼダ家の当主として君臨するジャコモは存在感タップリだし、コンサルヴォや親友のジョヴァンニーノはハンサムで華がある。また母親がジャコモ以上に可愛がったジャコモの弟のライモンド伯爵（フランコ・ブランチャローリ）や、ジャコモの叔父にあたるブラスコ師（ペップ・クルス）やガスパレ公爵（セバスティアーノ・ロ・モナコ）、そして平民ながらジャコモの妹ルクレツィア（ジゼルダ・ヴォロディ）と結婚した弁護士のジュレンテ（パオロ・カラブレイジ）等、本作に登場する多種多様な男優陣はそれぞれ存在感と華がある。ところがそれに比べて女優陣は？

私が美人だと思えたのは、コンサルヴォの妹であるテレーザ（クリスティーナ・カボトンディ）とコンサルヴォがナンパしたためとんでもない目に遭わされる平民の娘コンチェッタの2人だけ。つまり、ライモンド伯爵の妻になるマティルデやジュレンテ弁護士と結婚したルクレツィア、さらに何度も死産をくり返した挙げ句夫に小間使いのローザをあてがって息子を産ませるジャコモの妹キアラ（アンナ・マルチェッロ）らはおしなべて存在感が薄く華がない。『山猫』ではクラウディア・カルディナーレの存在感と華が圧倒的でアラン・ドロンにきっちり対抗できていたが、その点本作の女優陣はイマイチ……。ちなみにキアラが小間使いに生ませた息子がタンクレディだが、このタンクレディこそ『山猫』でアラン・ドロンが扮していた役だ。

<「憎悪が人間を鍛える」という哲学は？>

民主党の鳩山由紀夫総理の理念は、「友愛」。私はそれを否定しないが、果たしてそんなキレイ事だけでどこまでやっていけるのかは、かなり心配だ。時代が大きく変わろうとしている19世紀に貴族として生き延びるためには、そしてまたウゼダ家の中で権力を一手に掌握するためには、やはりジャコモが言うように「憎悪が人間を鍛える」という哲学の方が私には理解しやすい。もちろん、当の本人は母親が自分以上に弟のライモンド伯爵を可愛がっていたことへの反発としてあえてそんな理屈で自分を納得させていたわけだが、面白いのはそんな父親に反抗し続けたはずの長男コンサルヴォが、いつの間にかそれと同じ哲学を持つ人間に変身したことだ。

去る11月20日キネマ旬報社が発表した「日本映画・外国映画ベスト10：キネマ旬報ランク」では『ゴッドファーザー』（72年）が見事外国映画の第1位に輝いたが、それには私も納得。『ゴッドファーザー』でも、結局マーロン・ブランド扮するコルレオーネ家の首領ヴィトーの跡を継いだアル・パチーノ扮する三男のマイケルが「憎悪は人間を育てる」という哲学で父親と同じ権力者に変身していったが、本作のコンサルヴォも全くそれと同じ。8・30総選挙で圧勝し、民主党の幹事長となった小沢一郎は現在権力を一手に掌握しているようだが、ひょっとしてそんな彼の哲学もジャコモと同じ？「憎悪が人間を鍛える」という哲学は決して望ましいものではないが、「友愛」だけではとても無理。鳩山総理も少しはそんな哲学を加味する必要があるのでは？

2009（平成21）年11月26日記